社会との交流めざし独自活動

編集者から見たクラブＣＩＡ・ＥＩＡ

なんと個性的で、自らの信念・生き方を貫いている方々なのだろうか。これが「クラブＣＩＡだより」「クラブＥＩＡだより」を読み終えたあとの、偽らざる心境である。これまで冴えない人生を送ってきた者にとっては、その不甲斐なさに消え入りたくなってしまった。

仕事の話だけでなく教育・子育て、海外、芸術、さらにはグルメの話などなど。ＣＩＡの講演テーマは、硬軟入り混じって多岐にわたる。一方のＥＩＡは、環境を軸としたテーマで展開された。これらに共通していると実感するキーワードが「個性」「信念」「生き方」である。読み進めていくたびに、含蓄ある数々の言葉に触れ、感銘を受けずにはいられない。そして、これまでの人生で忘れていた何かを思い起こさせる、そんな記録でもあった。

中でも特に強烈に心に響いたのは、「人は年を重ねることで老いない。理想を持たなくなった時に老いる」との森戸順子氏（翻訳家）の言葉だった。講演会が最後に開かれたのは、今から25年前の1998年。なのに、まるで昨日の講演ではと錯覚するほど色あせてなく、今日にも通じるテーマばかりである。

一人ひとりの講演内容を紹介するのは、エッセンスだけでも膨大な文字数となり、ページ数の関係で不可能である。ぜひとも直接読んでいただくとしてお許しいただき、拙文では、建築を学んだ者としてやはり興味をひかれた講演について若干ふれさせていただきたい。

ＣＩＡでは「近未来のユートピア」をテーマにした桜井大吾氏（ＲＩＡ建築綜合研究所）の講演だった。1981年のことである。桜井氏は、街づくりにあたって行政は「法律の中でしか動けない」と痛切に指摘し、「常識的でしろうとである住民自身から本当の創造的なまちづくりは生まれる」と説いた。思わず「今も変わらないなあ」とため息が出そうなほど、今日的テーマである。

第1回のクラブＥＩＡで「環境について」と題した鈴木慶明氏（愛知県環境保全公社）の講演（1993年）も同様である。「日本が環境問題から抜け出すには、いままでの大量生産・大量消費システムをリサイクル100%の社会システムに構築していくしかない」と断言した。1996年の「都市の気候は変えられるか」をテーマにした堀越哲美氏（名古屋工業大学教授）の「これからは自然にとってよい、アクティブな気候改変をしていくことを目指したい」との決意も、先見の明であると痛感する。

長崎県・五島列島の小さな島に生まれ、社会常識にはコンプレックスがある身にとっては、都会的センスを感じさせる講師の海外や芸術、グルメの話は新鮮で眩く映り羨ましくもあった。海外の話は、その国の文化や暮らしを知るための貴重な情報ばかり。教養を高め幅も広がるといっては言い過ぎかもしれないが、とても勉強になった。芸術では、その奥の深さにただただ驚き、グルメでは、味わい方やマナーに関するお話に、自らの無知を恥じ入った。

活動記録は、ＰＥＳ建築環境設計にとって、おそらく宝物そのものであろう。その宝物を残し拝読させていただく機会を与えていただいたことに感謝したい。50周年を機に再びこうした講演の場をつくっていただければと願う。　（浜本巧）